

## 上毛野における古墳時代社会の成立過程

深澤 敦 仁

本研究は、東日本屈指の古墳時代社会の繁栄を成し遂げた「上毛野地域」(以下、上毛野)が、その基礎を築いたとされる3世紀から4世紀にかけての動向について、検討を加えることによって、その成立要因を明らかにすることを目的とした。

そして、その目的を達成するために、考古学的情報を時間的及び空間的に整理し位置づけることで面期を抽出し、それがどのような事象によって顕在化するかを追求した。

以下、論文の構成に従い、論じていく。

第1章では、本研究の目的を明示することと共に、上毛野を14地域(関連する周辺地域も含む)に区分を提示した。前提として地域区分を行う理由は、上毛野が主に地勢的差異によってその歴史展開が異なるからあり、本研究の根幹に関わることとなるからである。

第2章では、上毛野の古墳時代前期の土器編年に再検討を加え、本研究の骨子となる時間軸の整備を行った。上毛野には、「石田川式土器」と呼称される古墳時代前期の土器群が存在するが、その編年的位置づけを検証する分析を行った。なお、上毛野の各地域毎の土器編年の検証も行い、本研究で基幹土器編年として用いる「群馬南部地域」土器編年とそれらの併行関係の検証を行った。このことにより、可視的には異なる各地域の土器様相の同時期性を把握できるタイムスケールを構築した。

第3章では、古墳時代前期の上毛野に流入してくる他地域の土器(外来系土器)の様相について検証を行い、それらが上毛野エリア内でどのような動きをするかについて再確認した。この際、視点として外来側とともに在来側からの視点を重視し、移入する外来情報を在来側がどのように選択し、定着させているか、その姿を土器様相の中から見いだせるよう検討を加え、一定の方向性を得ることができた。上毛野は、先行研究により、東海西部地域の外来系土器の移入が圧倒的に多いとされるが、在地側からの検討に抛れば、東海系外来要素受容の前段に、北陸系要素や吉ヶ谷式系要素が比較的広域的に影響を及ぼしていることを確認した。

第4章では、墓制は集団定着のひとつの指標という考えのもと、古墳時代前期に広まる前方後方形及び方形周溝墓についてその存在要因や異なる形態の周溝墓の相関性について検討を加えた。この結果、周溝墓は、古墳前期中段階において多出し、かつ平面形状と平面規模の差異によって階層化が進行していることが明らかとなった。さらに、そうした階層化が進む中においても、最大規模の周溝墓には上限値(方台部一辺20m前半台)が存在することが明らかになった。さらに、前方後方形墳墓の設計企画を検討することにより、同じ前方後方形を呈する墳墓でも、概ね45～50mを境として設計企画が異なることが判明した。

第5章では、古墳前期新段階に位置づけられる成塚向山1号墳の調査データを基点とし、高塚としての特有の性格を墳丘盛土の構築方法に着目して検討を加えた。さらには、そこで得られた知見をもとに、上毛野の前期古墳を再検証し、新たな古墳の相対的な時期関係

案を提示し、上毛野の古墳時代前期の墳墓の様相の把握に努めた。

第6章では、これまでの検討分析の中から得られた成果を通じて、上毛野の古墳前期社会の特徴と言える点をまとめた。特に本研究で注視できる特徴は、所謂「山麓ルート」の開通であり、具体的には群馬北部地域と勢多地域が古墳前期古段階において「地域間連結」したことが、上毛野の古墳前期社会の枠組みの形成に大きな影響を与えたと位置づけた。

第7章ではこれまでの分析を総括し、古墳前期古段階の「地域間連結」、古墳前期中段階の「地域内での階層化」、古墳前期新段階の「高塚の重層化」を経ることが、上毛野の古墳前期社会の成立過程であると結論づけた。

そして、こうした古墳時代前期の先には、上毛野においては浅間山古墳等のヤマトとの関係性を強く持つより成熟した社会、古墳時代中期社会が存在するわけであるが、そうした古墳中期社会への胎動も古墳前期社会の中に認められることも指摘した。